
蝉が泣く日

子々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝉が泣く日

【Nコード】

N2845B

【作者名】

子々

【あらすじ】

クラスメートの山村が死んだ。全てはそこで終わったはず。だけど、それは始まりだった。山村にとり憑かれたわたしは彼を殺した犯人を捜すことになったけれど、どうやらそこには何かあるらしく……。

第1話・山村とわたし（前書き）

元は原稿用紙に書いてあるものなので、読みにくい箇所があります……。予めご了承ください、すみません。

第1話：山村とわたし

身体から生気を吸い取るかのように照りつける太陽と、うるさく鳴く蝉の音をいまいましく感じながら、頬にへばり付く髪を人差し指と親指で摘み、払い除けた。外に出るのを拒み、夏休みの間じゅう家の中にひきこもっていたわたしに、夏の暑さはクセモノだった。

わたしは橋の欄干に両肘をつき、下に流れる川を見下ろした。そこだけが別世界のように太陽に反射されてキラキラと光りを放っている。赤く装飾された欄干はサビ落ち、赤い皮膚の剥がれた部分からはこげ茶色の鉄が顔を覗かせていた。肘についたサビを払いながら、わたしは欄干から数歩後退した。

そんなわたしのすぐ後ろを小学生ぐらいの男の子たちが楽しげに駆けていった。通り過ぎるときに涼しい風が吹き抜けた。わたしは彼らの背中を、目で追いかけた。明るい笑い声と共に姿も消えたが、それでもまだ、その一点をぼんやりと眺めていた。

わたしは太陽を嫌っていた。

身を太陽の下に投げ出すのは、わたしにとっては高いビルの屋上から身を投げだすようなものだった。

死ぬほど嫌いなことをするのは、それを上回る程のことが起こってしまったからだ。いまだに信じられずにいるわたしに追い討ちをかけるかのように、それは今、目の前で確かに起こっている。

「目障りなんだけど」

目の前にいる人物にそう言い放った。周りの人には、わたしの視線の先にあるものは真っ青な空といくつも連なるマンションだけだろう。

しかし、わたしにはシャボン玉のように人がプカプカと浮かんでいる異様な光景が見えていた。

そいつ、山村はつい一週間程前にトラックにひかれて死んだわたしのクラスメートだ。

彼の死はとてもアツサリしたものだった。即死だったため、苦しまずに死んだようだが、肉体は見るも無惨な姿になっていたらしい。そして山村は今、わたしの目の前に飛んでいる。視力は悪くないのに山村が前に立ちはだかると景色がぼやけた。それがすごく目触りだった。前に並ぶマンションが波打っているように見え、クラリと目が焦点から外れそうになった。

「あれ、俺のマンション」

山村は欄干に立ち、目の前を指さした。しかし前にはたくさんのマンションが並んでいるため、どれが山村のマンションなのか分からなかった。太陽のせいで目が半開きになる。わたしは山村の指さす方を見るフリをして、テキトウな場所を見ていた。

「母さんたち元気かなー」

「一週間会ってないだけで何言ってるのよ」

「まだ一週間しか経ってねえのか」

山村はしみじみと言った。蝉の耳障りな音がうるさく、山村の声は聞き取りにくかった。わたしは山村の横顔を横目で見やった。死体とは違つて、隣にいる山村はとても綺麗だ。

わたしは山村にとり憑かれている。それは山村の意志でもわたしの意志でもない。いつの間にか離れることができなくなってしまったのだ。

わたしは幽霊なんて一度も見たことがなかった。それなのに山村の姿だけは見えた。山村と仲がよかったわけではない。共通点といえば山村が死んだ日に一緒に日直をしていた、というぐらいだった。その日直の日に山村と初会話をしたほどで、その記念すべき初会話は、わたし日誌持つて行くね、じゃあ俺は戸締まりしとくな、とこれだけだった。山村が死んだと聞いたときは嘘だと思い、不謹慎にもわたしは笑ってしまった。

でも、山村は本当に息も心臓も止まっていて、悪質な冗談だとは思いたくても思えなかった。

葬式るとき、棺には山村の死体が入っていたが、あまりにも無残な姿のため最後に一目、というのはなかった。すぐに火葬され、灰になった。残った骨を割り箸で拾いあげる親族や先生、友達。わたしはそれをただ突っ立って見ていた。

山村の灰がパラパラと地面に少し落ちた。灰に気づかずに泣きな

がらその上を通りすぎる親族たち。

わたしはその奇妙な光景をジッと黙って見ていた。灰はきつと、
今でも靴裏にへばりついているだろう。そう思うとゾツとした。

第1話：山村とわたし（後書き）

ここまでお読みくださり有難う御座いました！

このお話は、高校生の某文芸賞に出そうと思っていたものです。色々あり出せずに終わったのですが、このまま封印するのはもったいない気がしたので、連載という形で載せようと思います（^^）

「蝉が泣く日」は全5話で完結予定です。毎日投稿するつもりなので、宜しく願います。

感想、アドバイスなど、お時間のあるときにでも是非お願いします！どんな些細なことでもいいので、思ったことを言っただければと思います。

恋愛のジャンルに入るのか危ういですが。

2006/12/15 藤原千世

第2話：事故現場

「あのさ、お願いがあるんだけど」

山村はそう言って、わたしのすぐ隣を飛んできた。わたしたちはあてもなく歩きまわっていた。汗が滲む度に髪の毛がペタツと頬や額にはりついてきて鬱陶しい。蝉の音と車の音が混ざり合った雑音が耳につく。コンクリートの道は熱を集めているせいか、足裏から熱さがジリジリと伝わってきた。

わたしは山村の声などぼぼ聞いておらず、無意識に相槌だけを打っていた。

「犯人を知りたい」

「無理」

犯人なんて、とわたしはぼやいた。

警察でも探偵でもない学生が、山村をひいた犯人を見つけるなんてできるわけがない。構わず歩き続けるわたしの前に山村は立ちはだかった。視界が一気にぼやけ、一瞬クラツとした。わたしは頭を抑え、数回こめかみを叩いた。ポケットから出した右手は汗ばみ、乾いた音が鳴った。わたしは歩道の真ん中に立ち止まった。

すると、自転車のベルがチリンチリンと二度響く音がした。しかしわたしは山村の薄黒い眼球から目をそらすことも、動くこともできなかった。自転車はわたしのすぐ隣を通り過ぎ、それに乗っていたおばさんがわたしを不審気に一瞥していった。

山村は一向にわたしから目を離さず、口元をニッと吊り上げた。蝉の音も車の音も子どもの笑い声も全ての音がブツツと切断された。脳みそが混ぜられているような気持ち悪さと共に、寒気に襲われた。恐怖で体が強張り、額に汗が流れ出た。

山村のレンズに映るわたしの姿は、怯えた犬のように震え、とても惨めな顔をしていた。

「頼むよ」

今にも倒れてしまいそうだった。ふと、山村が死んだ日に孵化した蝉が今日、死ぬ日だ、と思った。

事故現場は車が何台か行きかっていた。多いわけでもないが少ないわけでもない。電柱に白い棒が突き出しており、そこにぶら下がっている真つ青な看板には白いゴシック体で『事故多し！ スピード落とせ』と書かれていた。

そこから二十メートルほど歩くと曲がり角があった。山村が死んだその場所には花やお菓子が供えられていた。白いガードレールがべっこりと凹んでいる。それがとても生々しく見えた。

「そう、ここだ。俺、ここで死んだんだ」

山村は独り言のようにそう呟くと、そこをジッと見つめた。わた

しは来るときに何となく買った一輪の花をソツと電柱の近くに置いた。そして手を合わせた。山村は「おいおいやめてくれよ」と言っ
て苦笑いを浮かべた。

「痛かった？」

「全然。気が付いたら死んじやってたから」

山村は空を見上げた。

わたしは鞆の中から携帯を取り出し、事故現場を撮っておいた。そこに山村の姿は写らなかった。わたしは写真を撮り続けた。

車のけたたましい音が鳴り響き、わたしのすぐ隣を物凄いスピードで通り過ぎていった。写真を撮りながらいつの間にか道路にはみ出していた。わたしは歩道へ戻り、山村に事故当時の詳しい状況を尋ねた。

その日、雨が降っていた。

下校時間も遅く、辺りは薄暗かったらしい。この道を山村は歩いていた。傘の骨が何度か横の塀に擦れた。雨は激しさを増すばかりで、遠くでは雷が鳴り響いていた。右側にある道路を車が何台か走り去っていき、水しぶきをあげたという。辺りには山村しかいなかった。

そして、何かが光った。雷が落ちたんだと思った。少し遅れて、雷鳴。耳鳴り。傘が手から放れた。眩しくて片目を瞑る。右目から見えた、トラック。一瞬で、山村は死んだ。

「全く理不尽な話だぜ」

山村は地面に仰向けに寝転がって言った。車が山村の上を踏みつけていった。

「雷だと、思ってたんだ」

山村は落ち着いた声色で言った。悔しがる素振りも、哀しがる素振りもなかった。

わたしは再度、ガードレールを眺めた。見事に原型を留めていない。コンクリートの地面を見ると、わたしは少しおかしいことに気がついた。山村の話ではトラックはここに突っ込んできて、山村はここで死んだ。それだと明らかにおかしかった。

わたしは山村を見た。山村は空をボーッと観察していた。すでに自分の事故のことなど興味がなくなっていた。しばらく山村を見ていると、山村はミーンミーン、と呟いた。山村が蝉の真似を始めると、測ったかのように周りから蝉時雨が降りだした。山村はその光景に楽しい笑みを浮かべた。蝉の音はしばらくするとピタリと止んだ。わたしは山村を見つめ続けた。髪の毛がわたしに纏わりつくのを、鬱陶しく感じながら。

第2話：事故現場（後書き）

お読みくださり有難う御座います！

あと3話で完結なので、最後までお付き合いくださると嬉しいです。
アドバイスや感想があればお願いします。

第3話：引き出しの骨

クラスメートが死んでもわたしは泣かなかった。それはきっと死んだ生徒がそれほど親しい奴じゃなかったからだ。喪服を引っ張り出すのが大変だった。暑いのに長袖を着るのが嫌だった。死んだ生徒の話は自然とわたしのところへ伝わってきた。興味なんて微塵もなかった。葬式に出たのは、三度目だった。身近な人が死ぬのに、わたしは慣れていた。不謹慎にも、またか、と思った。だから今の状況は、そんなわたしに神様が罰を与えたんだろうと考えた。

わたしの部屋にある茶色い引き出しには、ティッシュに包まれた山村の骨が一欠けら、仕舞ってある。ティッシュにはジワリと赤いものが滲み浮き出ていた。どうしてそれがここに入っているのか、分からずに、ティッシュをまた上から被せ、赤いものを隠した。それがもう、一週間も続いている。

次の日もわたしたちは事故現場へ向かった。その日は雨が降っていて、昼なのに辺りは薄暗かった。誰ともすれ違うことなく、隔離された町のようにで淋しげな雰囲気漂っていた。

蝉の音も、車の音も、子どもの声も、何もなく、雨が至るところに叩きつけられる音だけが耳に入ってきた。こんな日に山村は死んだのだと思うと、言いようのない虚しさ、早く誰の目にも見えないうようにしてあげたいという気持ちで胸がいっぱいになった。

わたしは、傘の柄を両方の掌で粘土をこねるように回しながら、事故現場の歩道で仁王立ちしていた。ジッと道路を睨みつけ、時間が経つのをひたすら待った。

山村は道路に大の字になって寝転がっている。三台の車が山村をひいていった。山村は楽しいと言って声を上げて笑った。わたしは気にせず、傘の柄を回し続けた。

時計を持っていなかったため、どれだけ時間が過ぎたのか分からなかった。その間、誰もこの道を通らなかった。車も数台通り過ぎただけだった。山村はそれでも寝転がったままで、時々蝉の真似をした。でも、蝉時雨は降らなかった。

「もう帰らねえ？ 暇なんだけど」

山村がポツリと呟いた。わたしは聞こえないフリをした。雨は怒鳴るように降り続け、百円のビニール傘はそろそろ限界のように思えた。足先、肩、腕に雨が当たる。遠くで空が光った。数秒遅れて、雷鳴。

そう、ちょうど、こんな感じだ。

山村の呟きを背に、わたしは走った。数十メートル戻り、上を見上げた。青い看板を確認する。看板にはいくつもの水滴が滴っていた。走った拍子に飛び跳ねた雨水が皮膚に跳ね上がっていて、そこ

が妙に冷たかった。

息を整え、わたしはゆっくり、ゆっくりと走ってきた道を歩きだした。山村が死んだ場所へ、あの日を再現するために。雨なのか汗なのか頬を伝い落ちた。傘がガガガと鈍い苦しい音を発しながら窮屈そうに横の堀に擦れた。手に振動が伝わる。遠くで雷が鳴った。

しばらく歩くと、山村の姿が見えた。まだ寝転がっている。それを見えないことにして、歩いた。山村は横目でわたしを一瞬だけ見て、興味がないのかまた空を見上げた。雨水が足にぶつかってくる。そのとき、雷が閃光した。少し遅れて……。風が激しく吹き抜け、手から傘が放れた。それが道路の真ん中に落ちる。トラックが山村の上を堂々と踏みつけて走り去っていった。

わたしは、トラックがいつもここを同じ時間に通ることを知っている。雨はわたしを容赦なく叩きつける。濡れた髪が頬や額にこびり付き、鬱陶しい。山村のミーンミーンという声が、雨音に混ざり、わたしの耳へと流れてきた。

第3話・引き出しの骨（後書き）

お読みくださり有難う御座います！ あと2話で終わります。よ
ければお付き合ってください（^^）

感想やアドバイスがあれば是非お願いします。

第4話：引き裂かれたもの

それから毎日わたしたちは歩き回った。

山村は涼しげな顔でわたしの手前を歩いている。本当に死んだ人間なのかと思う。山村には幽霊らしさがなかった。呪ってやる、という怖い顔を一瞬も見せない。どうして俺が、という哀しい顔さえ見せない。むしろ死んだことを楽しんでいるように見えた。

ふと思った。もしかして山村は犯人を見たのではないかと。山村の余裕はそこからきているのではないだろうか。

わたしの手に力がこもった。知らぬ間に山村を睨みつけていた。下唇にビリッと電気が走ったような痛みがし、人差し指の腹を唇に押し当てた。指の先に鮮やかな赤い液体がぬるっと付着していた。唇を舐めると、鉄の味が口の中に広がった。汗も混じっていたのか塩の味もした。

「何してんだよ。行こうぜ」

立ち止まっていたわたしに山村は言った。行こうと言っても行くあてなんてなかった。事故現場に行ったところでさして変化はないだろう。

「行くってどこに？」

わたしは歩道の真ん中に立ちすくみながら尋ねた。虫捕りあみを手に持ち、首に虫かごをぶら下げた少年がわたしにぶつかってきた。よろめくわたしを訝しげに見上げ、また走っていった。

山村はそんなわたしを無表情で見ていた。そして、口端をスローモーションのようにゆっくりと吊り上げた。

「どこって、俺が死んだ場所に決まってるじゃん」

「何回行ったって同じだよ」

視線を山村から地面へと無意識に反らした。同じなんかじゃない、山村の低音が蝉の音に邪魔をされながらわたしに伝わってきた。

「犯人は、きつと現われる」

脇の下に、気持ち悪いぬるさを感じた。

自分って孤独だな、と思った。世界でたったひとりなんだ、と思った。だからってどうすることもできなくて、今日もわたしはぼんやりと天井を見つめていた。

薄暗い部屋には月明かりだけが頼りだった。山村は部屋に入らず、扉の向こうにいるのがわたしと山村の暗黙のルールだった。わたしはタオルケットの中へもぐり込み、体を小さく丸めた。

山村が羨ましいと思った。

そう思った瞬間、わたしはタオルケットを強引に退かし、上半身を起こしていた。自分の思考に驚いた。背中には汗の感触がし、手が小刻みに震えていた。

わたしは慌しくベッドから降りて、机の引き出しを開けた。ティッシュをグシャグシャに握りしめて外し、赤みのかかった骨を掴み

取り、壁にむかって投げつけた。ほとんど無意識だった。パキンと乾いた音がして、壁に当たった骨が二つに折れた。少し動いただけでひどく息切れしていた。体がヘナツと床へ崩れ、ひやりと体が冷たくなった。

「山村……、冷たい」

「窓が開いてるんじゃないの」

窓は開いていなかった。窓を見て、それを確認したと同時に、溜まっていた涙がボタボタと溢れ出した。家に誰もいないことをいいことに、わたしは喉が痛むまで、声を上げて泣き続けた。その間中、ずっと体は冷たくて、涙が伝う頬だけが熱を帯びていた。

床には、割れた骨が、虚しく転がっていた。

いつかわたしは人を殺すか、誰かに殺されるだろうと思っていた。後者でも別にいいと思っていたが、それが覆されることが起きた。わたしの教科書がズタズタに切り裂かれていたのだ。初め、それに気づいたときは訳が分からなかった。しばらくその教科書を見つめていると、段々恥ずかしさが込み上げてきた。自分でも驚くほど、悲しさなんて起きなかった。ただ恥ずかしかった。すぐに教科書を机の中に戻し、顔を伏せていた。

それから毎日教科書やノートが無造作に切り裂かれた。時が経て

ば経つほど、恥ずかしさよりも虚しさを感じた。周りの人が全て疑わしかった。わたしに向けられた笑みも、作り物だったらと思うと、怖くなった。教科書やノートを持って帰れば、机や椅子が犠牲になった。

「ひどいことする人もいるんだね。気にしないほうがいいよ」
友だちが心配そうにそう言ってきたが、それすら嘘に思えた。

いつしかわたしは笑ったり泣いたりすることを忘れた。それにつれ、友だちもわたしと距離を置くようになっていった。それでも、わたしは気にはしなかった。悲しくなんてなかった。近くに人がいて、いつか自分がある教科書のようにズタズタに切り裂かれて殺されてしまうんじゃないかと、日々怖くて周りの人を全て疑って生活するのに比べたら、その方がよっぽど良かった。

綱を渡るような緊張した毎日の中で、わたしにも微かな光りがあった。クラスメートの山村太一が、たった一つの支えだった。山村は男子にも女子にも人気があって、明るくて、わたしとは正反対の光りだった。わたしも山村みたいになりたいと思っていた。少しだけ話をしたいと思っても、近づいたら自分が惨めに見えるだけだと思ひ、いつも山村から遠いところにいた。

でも、その光りの奥の奥は闇だった。黒くて濁っていて、わたしと同じ闇だった。それを知ったとき、わたしの中で何かが変わったようだった。

第4話：引き裂かれたもの（後書き）

お読みくださり有難う御座います！

あと1話で完結です。連載といってもかなり短い小説ですが、最後までお付き合いお願いします。

第5話：蝉

太陽の光りも、蝉の羽ばたく音も、夏が進むにつれ、騒がしくなった。山村の姿を目の前に置きながら、橋を渡り、店の前を通り、狭い歩道を歩いた。

口には出さないけれど、山村は消えかけている気がする。いや、確かに消えかけている。手を延ばしてみたが、宙をかすめてしまい、ひやりと冷気だけがした。

「もう、何度目かな。ここに来たの」

花が活けられている電柱の前で止まり、山村は呟いた。供えられた花は腐りかけていた。わたしが置いた一輪の花は茶色く変色している。

「俺も段々忘れられていくのかな」

「……分らない」

「どうせお前も忘れるんだろ」

「うん、わたしは忘れる」

わたしがそう言うと、山村は声を上げて短く笑った。そして、口角を上げたまま、俯いた。わたしは腐った花を見つめた。

「俺がはねられたとき、どう思った？」

「ああ、死んだ。……って思っただけ」

山村は顔を上げて、わたしを見た。そして、ニンマリと笑みを浮かべて、わたしへと手を延ばした。手首を掴もうとしたのか、手首

付近に冷気が走っただけで、感触はしなかった。

「恨んでる？ 謝ってほしい？」

「恨んでない。謝ってほしくない」

「ごめんね」

「なんだ、結局謝るのかよ」

苦笑を漏らし、山村は空を見上げた。眩しさで目を細めることはなかった。

「生きていたら、お前とこんな風に話したりできなかった。だから俺、別にお前のこと恨んでない、死んだことを悔やんでない、自分がしたことを悪いなんて思っでない」

山村は悲しそくに眉を寄せた。わたしが返事の言葉を探しているときに、ただ、と山村は呟いた。

「こんなに近くにいるのに、触れないのが嫌だ。そのうち、俺の姿が見えなくなつて、声が聴こえなくなつて、忘れられてしまうのが、嫌だ」

わたしへと顔を向けた山村の表情はクシャクシャになっていて、泣いているように見えた。なんだ、悔やんでいるじゃない。そう思ったけれど、声には出さなかった。頬を一粒の涙が静かに伝った。

「バイバイ」

蝉時雨が降り続ける中で、山村の声と同時に一匹の蝉がわたしの目の前を飛んでいった。一瞬視界がその蝉に遮られた。蝉が通り過ぎ、視界が晴れたとき、山村はいなかった。

また一粒、涙が落ちた。

わたしはその場から走り出した。うるさく泣く、蝉たちを鬱陶しく思いながら。

第5話：蝉（後書き）

ここまでお読みくださり有難う御座いました。
連載にしては短かったですが完結です。
今度はもっと長い連載を試してみたいです。
評価などありましたら是非お願いします。

2006・12・19・藤原千世

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2845b/>

蝉が泣く日

2010年10月8日13時19分発行